



秋刀魚の味 彼女はガラス越しに語りかける

今村純子

「……なんでもないことは流行に従う。重大なことは道徳に従う。芸術のことは自分に従う」（小津安二郎、於座談会「酒は古いほど味がよい」）

『小早川家の秋』（一九六一）で主人公の死は、「もうこれでおわりか、おわりか」と言って頓死した」と妻の口から軽快な口調で家族に告げられる。人生の始点も終点も、実のところ、あたかも神々の笑いに委ねられるかのごとく、わたしたちの与り知らぬ偶然性に翻弄されている。期せずして遺作となつた『秋刀魚の味』（一九六二）には、これまでの小津作品の妙味が随所に散

りばめられている。「映画ってのは、あと味の勝負だと僕は思っていますよ」「映画はあと味の勝負」と小津自身述べているように、観る者に何度も立ち返りたくなる衝動を掻き立てる作品である。

それは、本作品の製作が、小津にとってもっとも親しい他者である母の死の直後であることと無縁ではあるまい。本作品には、親しい他者の死が直接的に描写されることはない。それに代わって、親しい他者の不在や沈黙を「生きること」が克明に映し出されることになる。

それゆえ、本作品における作家の分身は、複雑な様相を呈することになる。笠智衆演

のいかなる作品よりもはるかに、「映像作家とは、橋の下でコモをかぶり、客をひく娼婦にすぎない」（吉田喜重「自己否定の極変革を」）という自らの信条を生きようとしたのではなかろうか。そして娼婦といふ言葉には、体を張つて生きるというのみならず、色気を漂わせつつ、世間からの屈辱を甘んじて受け入れるという意味合いが込められていることが忘れられてはなるまい。

他者をモノとして扱うことと自分がモノになる

『秋刀魚の味』では、笠智衆（父・主人公）、佐田啓一（長男）、中村伸郎（中学の同級生）、東野英治郎（中学の恩師）といった、小津作品に馴染みの面々である男性陣とは対照的に、杉村春子（中学の恩師の娘）、岩下志麻（娘）、岡田茉莉子（長男の嫁）、岸田今日子（バーのマダム）といった、瑞々しく、個性のはつきりした女優が起用されている。とりわけ岩下志麻演ずる主人公の娘は、これまで小津作品に登場する女性たちとは異なり、素朴に自らの幸福を考える

のではなく、状況を見極め、判断し、そのなかで、自らのみならず、父がもつとも活き活きする道を、自らの意志で選択し、自らの人生を創造しようとしている。すなわち、親しい他者の歡喜や悲哀を自分自身のものとして感受し、そのことで幸福感に満たされている。それは、男やもめである父と弟に女手が不可欠だという実際的な理由からではない。そうではなく、自分がなければ、家のなかに光彩を放ち、家族を照らし出す「詩」がなくなってしまう、といふ確信があるからであろう。それはおそらく、妻＝母の死という極限の悲しみを嘔みしめ、不在と沈黙と共に抱きしめてきたという絆の上に成り立つていてにちがいない。

ところが、『秋刀魚の味』において、女性をモノとして扱う度合が、これまでの小津作品にないまでに際立つている。他方で、そう扱われる女性たちは、かつてないほどに確固とした自由意志をもち、たとえば、会社の建物に同化するよう地味な服を身に着け、社内の廊下の壁沿いを真直ぐ、

ずる父・主人公のみならず、岩下志麻演じる娘をはじめとして、会社の秘書、中学の恩師の娘など、自らの父への想いゆえに人生の選択をする女性たちもまた、作家の分身であろう。なぜなら、親しい他者とは、まさしくその人を自分自身のように生きたいと想う人もあるからである。男やもめの主人公はまた未亡人となつた小津の母でもあり、父を想つて人生の選択をする女性たちは、また小津自身でもある。

「他の兄弟は、それぞれ嫁をもらい、嫁にゆき、残つた母と僕との生活が始まつてもう二十年以上になる」（『ここが檜山』）と小津は淡々と語つている。だが、長年、小津の眼差しのなかで生きてきた笠智衆は、『ご結婚なさつたほうがよかつたのではないでしようか。なんとなくそういういます』（笠智衆『小津安二郎先生の思い出』）と述懐している。わたしたちの生のもつとも大切なこの心の揺れ動きは、けつして言語化されことになる。

それゆえ、本作品における作家の分身は、複雑な様相を呈することになる。笠智衆演

られる事ではなく、「そう、じゃ、いずれはお嬢さんだね」と続けられる。主人公も含め、男性陣たちは、二十四歳という結婚適齢期をはばかる事なく口にし、それはあたかも、ベルトコンベアに載せられた部品の「四グラム」が適性品であり、三三一グラムは規格外だと見極めてゆくがごとくである。

二段階目は、中学の恩師の娘である。恩師を招いた同窓会で、教え子たちと恩師とのあいだに、「先生、お嬢さんいらっしゃいましたね。/きれいなかわいいお嬢さん……。/お孫さんいくつですか?」「それがね、わたしは早うに家内を亡くしましてね、娘もまだひとりでおるんですわ」という会話が交わされる。さらに、泥酔した恩師を送り届けた際に出迎えた娘を、「あの娘だってどうか変だぜ。なんとなくギスギスしててさ。冷たくてさ。あれじゃヒヨーテン【恩師のあだ名】も寂しいよ」と、後日、同級生のひとりは主人公に酷評する。「若くて、美しい」ことが女性の美德であるならば、「老いて、醜い」状態に美德はない。

そして言うまでもなく、この世に生きているかぎり、年を取らない人はいない。その不合理性は、もうひとりの同級生が娘ほど歳の離れた女性と再婚して幸せを感じたり、それを同級生たちが品のない言葉や仕草でからかうという有り様でさらに強調されている。

モノに見守られている

キャラメラは蒼天をあおぎつつ、岩下志麻扮する主人公の娘が、兄の会社の後輩と、「やつぱり奥さんはやさしくしたほうが高いのかなあ」、「そうねえ。でも、あんまりやさしいのもいやねえ」と駅のプラットホームで他愛もない会話を交わす空間は、本作におけるもつとも美しいシーンのひとつである。主人公の娘は、青空に伸びてゆくがごとくに、自分の意志を貫いて生きようとしている。娘を不幸にしてはならない、と身を切るようにして主人公が縁談話をすすめようとする、彼女は兄の会社の後輩に好意を寄せていることがわかる。だがその好意は数回会った印象といったものにす

ぎないであろう。少なくともこの男性の存在は、父と「詩」を紡ぐ人生に比べれば、取るに足らないものであった。それゆえ、この同僚にすでに婚約者がいることを聞かされて流す娘の涙は、この男性と一緒にない悲しみというよりはむしろ、自分の意志によって人生を切り開くことができない痛恨によるものであろう。だが、父や兄にはそのことがわからず、彼女の心は、彼女が手継る洋裁の紐だけが知悉している。実際、もしこの男性との結婚が叶つたとしても、主人公の娘の将来は、「冷蔵庫やゴルフ道具や白い革のハンドバック」を購入することと幸せを同一視する、消費社会に埋没してゆく長男夫婦の有り様と類似したものになっていたであろう。

かつての教え子に送り届けられ、泥酔した父の姿に接して号泣する杉村治子扮する恩師の娘の悲哀も、自ら選択した自己犠牲的な生き方が父親の生をけつして活き活きさせていないという現実に直面してのことであろう。そしてふたたび教え子の振る舞いを受け、泥酔する恩師は、「寂しいんじ

る。

ここに収斂したのである。バーの室内を照らす薄桃色の瀟洒な電灯だけがそのことを知悉しており、主人公を温かく見守っている。

主人公と戦時の元部下のあいだには、「けど敗けてよかつたじゃないか」、「そうですかな。ううむ、そうかもしれないな、バカ野郎が威張らなくなつただけでも」という会話が交わされる。さらに娘を嫁がせた日、ふたたびひとりで訪れた主人公にマダムと問い合わせ、「ううむ、ま、そんなもんだよ」と主人公は応答する。葬式も結婚式も、多かれ少なかれ自分の力がいつさい及ばない無力を痛感する場でもある。ここに、わたしたちが生きるということは、わたしたちの意志が宇宙の必然性の流れのなかではひとつも意味がない、「軍艦マーチ」を背景に別の客たちが「帝国海軍は今晚五時三分、南島東方開場において……」「……敗けました」と述べるように、その矛盾のなかに立つということのうちにのみ、わたしたちの生が紡がれることが暗示されている。

『秋刀魚の味』

小津安二郎監督

カラー六作目である本作品において、構図、色彩、デザインが極まるのは、偶然出会った海軍時代の部下と訪れたバー街の電灯看板や室内の照明である。岸田今日子扮するバーのマダムと亡き妻が似ていると若干卑猥なニュアンスも含めて主人公は子どもたちに回想する。だが亡き妻と似ていると感じるのは、このバーでかけられている「軍艦マーチ」との協奏によるほうが大きいであろう。ふたたび会うことは叶わないかもしれない、と戦地に赴いたその一瞬の妻との眼差しの交換、それまでの夫婦生活のすべてが凝縮されたその一瞬が、「いま、

カラーワークである本作品において、構図、色彩、デザインが極まるのは、偶然出会った海軍時代の部下と訪れたバー街の電灯看板や室内の照明である。岸田今日子扮するバーのマダムと亡き妻が似ていると若干卑猥なニュアンスも含めて主人公は子どもたちに回想する。だが亡き妻と似ていると感じるのは、このバーでかけられている「軍艦マーチ」との協奏によるほうが大きいであろう。ふたたび会うことは叶わないかもしれない、と戦地に赴いたその一瞬の妻との眼差しの交換、それまでの夫婦生活のすべてが凝縮されたその一瞬が、「いま、